



日本近代文學研究會編集

現代日本小說大系

第十卷

河出書房版

現代日本小說大系 第十卷

昭和二十七年九月十日 初版印刷
昭和二十七年九月十五日 初版發行
定價 貳百參拾圓
地方定價 貳百四拾圓

著者 島崎藤村

發行者 東京都千代田區神田小川町三丁目八番地 河出孝雄

編集者 東京都千代田區神田小川町三丁目八番地 日本近代文學研究會 青野季吉

印刷者 東京都千代田區神田小川町二丁目四番地 矢部富三



發行所

東京都千代田區
神田小川町三ノ八
株式會社

河出書房

電話神田(25) 二三四七番
三一七四番

目 次

島崎藤村

家

解

説(青野季吉)

島
崎
藤
村

家

前篇

一

橋本の家の臺所では晝飯の支度に忙しかつた。平素ですら男の奉公人だけでも、大番頭から小僧まで入れて、都合六人のものが口を預けて居る。そこへ東京からの客がある。家族を合せると、十三人の食ふ物は作らねばならぬ。三度々斯の支度するのは、主婦のお種に取つて、一仕事であつた。とはいへ、斯ういふ生活に慣れて來たお種は、娘や下婢を相手にして、まめ／＼しく働いた。

爐邊は廣かつた。其一部分は艶々と光る戸棚や、清潔な板の間で、流許で用意したものは直にそれを爐の方へ運ぶことが出來た。暗い屋根裏からは、煤けた竹筒の自在鍵が釣るしてあつて、その下で夏でも火が燃えた。斯の大きな、古風な、どこか嚴しい屋造の内へ靜かな光線を導くものは、高い明窓で、その小障子の開いたところから青く透き徹るやうな空が見える。

「カルサン」といふ勞働の袴を着けた百姓が、裏の井戸から冷い水を汲んで、流許へ擔いで來た。お種は斯の隠居にも食はせることを忘れては居なかつた。

お種は夫と一緒に都會の生活を送つたことも有り——娘の

お仙が生れたのは丁度その東京時代であつたが、斯うして地方にも最早長いこと暮して居るので、話す言葉が種々に混つて出て來る。

「お春や。」とお種は下婢の名を呼んで尋ねて見た。「正太は奈何したらう。」

「若旦那様かなし。あの山瀬へお出たぞなし。」

斯う十七ばかりに成るお春が答へたが、その娘らしい顔は何の意味もなく紅く成つた。

「また御友達のところへ話し込んでると見える。」とお種は考へ深い眼付をして、やがて娘のお仙の方を見て、「山瀬へ行くと、いつでも長いから、晝飯には歸るまい——兄さんのお膳は別にして置けや。」

お仙は母の言ふなりに従順に動いた。最早處女の盛りを思はせる年頃で、背は母よりも高い位であるが、子供の時分に一度煩つたことがあつて、それから精神の發育が遅れた。自然と親の側を離れることの出來ないものに成つて居る。お種は絶えず娘の保護を怠らないといふ風で、物を言付けるにも、成るべく靜かな、解り易い調子で言つて、無邪氣な頭腦の内部を混雜させまいとした。お種は又、娘の友達にもと思つて、普通の下婢のやうにはお春を取扱つて居なかつた。髪もお仙の結ぶ度に結はせ、夜はお仙と同じ部屋に寝かしてやつた。

主人や客をはじめ、奉公人の膳が各自の順でそこへ並べられた。心の好いお仙は自分より年少の下婢の機嫌をも損ねまいとする風である。

支度の出来た頃、母はお春と一緒に働いて居る娘の有様を人形のやうに眺めながら、

「お仙や、支度が出来ましたからね、御客様に左様言つていらつしやい。」

と言はれて、お仙はそれを告げに奥の部屋の方へ行つた。

東京からの客といふは、お種が一番末の弟にあたる三吉と、ある知人の子息とであつた。斯の子息の方は直樹と言つて、中學へ通つて居る青年で、三吉のことを「兄さん、兄さん」と呼んで居る。都會で成長した直樹は、初めて旅らしい旅をして、初めて父母の故郷を見たと言つて居る。三人は橋本の家で一夏を送らうとして來たのであつた。

「御客様は爐邊がめづらしいさうですから、こゝで一緒に頂きませう。」

とお種はそこへ來て膳に就いた夫の達雄に言つた。三吉、直樹の二人も其傍に古風な膳を控へた。

「正太は？」

と達雄は、そこに自分の子息が見えないのを物足らなく思ふといふ風で、お種に聞いて見る。

「山瀬へ行つたさうですから、復た御呼ばれでせう。」

斯うお種は答へた。

蠅は多かつた。やがてお春の給仕で、一同食事を始めた。

御家大事と勤め顔な大番頭の嘉助親子、年若な幸作、其他手代小僧なども、旦那や御新造の背後を通つて、各自定まつた席に着いた。奉公人の中には、二代、三代も前から斯うして

通つて來るものもある。斯の人達は、普通に雇ひ雇はれる者と違つて、寧ろ主従の關係に近かつた。

裏の島で働く百姓の隠居も、其時手拭で足を拭いて、板の間のところにカシコマつた。

「さあ、やつとくれや。」

と達雄は慰勞ふやうに言つた。隠居は幾度か御辭儀をして、「頂戴」と山盛の飯を押戴いて、それから皆なと一緒に食ひ始めた。

「三吉。」とお種は弟の方を見て、田舎へ來て物を食べると、子供のことを思出すでせう。直樹さんやお前さんに色々食べさせたい物が有るが、追々と御馳走しますよ。お前さんが子供の時には、ソラ、赤い芋莖の御漬物などが大好きで……今に吾家でも食べさせるぞや。」

斯様なことを言出したので、主人も客も楽しく笑ひながら食つた。

お種がこゝへ嫁いて來た頃は、三吉も郷里の方に居て、まだ極く幼少かつた。其頃は両親とも生きて居て、老祖母さんまでも壯健で、古い大きな生家の建築物が焼けずに形を存して居た。次第に弟達は東京の方へ引移つて行つた。斯うして地方に残つて居るものは、姉弟中でお種一人である。

「お春、お前は知るまいが、」とお種は久し振で弟と一緒に成つたことを、下婢にまで話さずには居られなかつた。「彼が修業に出た時分は、旦那さんも私も矢張東京に居た頃で、丁度一年ばかり一緒に暮したが……あの頃は、お前、まだ彼が鼻涙を垂らして居たよ。奈何だい、それが彼様な男に成つ

て訪ねて来た——えらいもんぢやないか。」

お春は團扇で颯を追ひながら、皆なの顔を見比べて、娘らしく笑つた。

舊からの習慣として、あだかも茶席へでも行つたやうに、主人から奉公人まで自分々々の膳の上の始末をした。食べ終つたものから順に茶碗や箸を拭いて、布巾をその上に掩せて、それから席を離れた。

斯の橋本の家は街道に近い町はづれの岡の上にあつた。晝飯の後、中學生の直樹は谷の向側にある親戚を訪ねようとして、勾配の急な崖について、折れ曲つた石段を降りて行つた。

三吉は姉のお種に連れられて、めづらしさうに家の内部を見て廻つた。

「三吉、こゝへ来て見よや。是は私がお嫁に来る時に出来た部屋だ。」

斯う言つてお種が案内したのは、奥座敷の横に建増した納戸で、簾簾だの、鏡臺だの、其他種々な道具が置並べてある。襖には、亡くなつた橋本の老祖母さんの里方の縁續きにあたる歌人の短冊などが張付けてある。

「私が橋本へ来るに就いて、髪を結ぶ部屋が無くては都合が悪からうと言つて、こゝの老祖母さんが心配して造つて下さつた——老祖母さんはナカノ、屈いた人でしたからね。」とお種は説き聞かせた。

「へえ、其時分は姉さんも若かつたんでせうネ。」と三吉が

笑つた。

「そりやさうサ、お前さん——」と言ひかけてお種も笑つて、「考へて御覽な——私がお嫁に来たのは今のお仙より若い時なんですもの。」

薬研で物を刻す音が壁に響いて来る。部屋の障子の開いたところから、斜に中の間の一部が見られる。そこには番頭や手代が集つて、先祖から斯の家に傳はつた製薬の仕事を勵んで居る。時々盛んな笑聲も起る……

「何かまた嘉助が笑はして居ると見えるわい。」

と言ひ乍ら、お種は弟を導いて奥座敷の暗い入口から爐邊の方へ出た。大きな看板の置いてある店の横を通り過ぎると、坪庭に向いた二間ばかりの表座敷がその隣にある。

三吉は眺め廻して、「心地の好い部屋だ——どうしても田舎の普請は違ひますナア。」

「こゝをお前さん達に貸すわい。」と姉が言つた。「書籍を讀まうと、寢轉ばうと、奈何なりと御勝手だ。」

「姉さん、東京から斯ういふところへ来ると、夏のやうな氣はしませんね。」

「平素は斯の部屋は空いてる。お客でもするとか、馬市でも立つとか、何か特別の場合でなければ使用はない。お前さんと、直樹さんと、正太と、三人こゝに寝かさう。」

「ア——木曾川の音がよく聞える。」

三吉は耳を澄まして聞いた。

間もなくお種は弟を連れて、店先の庭の方へ降りた。正太が餘暇に造つたといふ養鶏所だの、桑畠だのを見て、一廻り

して裏口のところへ出ると、傾斜は幾層かの畠に成つて居る。そこから小山の上の方の耕された地所までも見上げるこゝとが出来る。

二人は石段を上つた。掩ひ冠きつたやうな葡萄棚の下には、清水が溢れ流れて居る。その横にある高い土蔵の壁は日をうけて白く光つて居る。百合の花の香もして来る。

姉は夏梨の棚の下に立つて、弟の方を顧みながら、「此節は毎朝早く起きて、斯うして畠の上の方まで見て廻る。一頃とは大違ひで、床に就くやうなことは無くなつた——私も強くなつたぞや。」

「姉さんは何處か悪かつたんですか。」と三吉は不審さうに。「えゝ、持病で寝たり起きたりしてサ……」

「持病とは？」

姉は返事に窮つて、急に思ひ付いたやうに歩き出した。

「まあ、病氣の話などは止さう。それよりか私が丹精した畠でもお前さんに見て貰はう。御蔭で今年は野菜も好く出来ましたよ。」

野菜畠を見せたいといふお種の後に隨いて、弟も一緒に傾斜を上つた。坂の途中を横に折れると百合、豆などの種類が好く整理して植付けてある。青い暗い南瓜棚の下を通つて、二人は百姓の隠居の働いて居るところへ出た。

石垣に近く、花園を歩むやうな楽しい小徑もあつた。そこから谷底の町の一部を下瞰することが出来る。

お種は眺め入りながら、

「私も、橋本へ来てから斯の歳に成るまで、町へ出たことが

無いと言つても可い位……眞實の家の内にばかり引込みきりなんですよ……用が有る時は奈何するなんて、三吉なぞは不思議に思ふかも知れないが、買物には小僧も居れば、下婢も居る。嘉助初め皆なで外の用を好く達して呉れる。ですから、私は家を出ないものとして居ますよ……女といふものは、お前さん、斯うしたものですからね。」

斯様な話を弟にして聞かせて、それから直樹が訪ねて行つた親戚の家々を指して見せた。いづれも風雪を凌ぐ爲に石を載せた板屋根で、深い木曾山中の空氣に好く調和して見える。

「母親さん、澤田さんがお出た。」

とそこへお仙が客のあることを知らせに來た。三人は一緒に母屋の方へ降りて行つた。

物置藏の側を歸りかけた頃、お種は娘と並んで歩きながら、

「お仙や、お前は三吉叔父さん、三吉叔父さんと、毎日言ひ暮して居たツけが——奈何だね、三吉叔父さんが被入して嬉しかね。」

と母に言はれて、お仙は奈何思ふことを言ひ表して可いかわ解らないといふ風であつた。斯の無邪氣な娘は、唯、「えゝ、えゝ」と力を入れて言つて居た。

庭傳ひに奥座敷へ上つてからお種は澤田といふ老人を三吉に紹介した。この老人は、直樹の叔父にあたる非常な神經家で、潔癖が嵩じて一種の癪疾のやうに成つて居たが、平素府の起らない時は口の利きやうなども至極丁寧にする人であ

る。

老人は三吉に向つて、よく直樹を東京から連れて来て呉れたと言つて、先づその禮を述べた。

「三吉。」と姉は引取つて、「この澤田さんは、矢張お前さんの父親さんのやうに、國學や神道の御話が好きで……父親さんが生きてる時分には、よく澤田さんの御宅へ伺つては、歌などを詠んだものだぞや。」

斯うお種が言出したので、老人も思出したやうに、

「え……左様だ……貴方がたの父親さんは、斯う大きな懷をして、一ぱい書籍を振込んで歩かつせる人で……」

思はず三吉は、この姉の家で、父の舊友の一人に逢つた。

背の低い、瘠ぎすな、武士らしい威厳を帯びた、憂鬱と老年とで震へて居るやうな人を見た。三吉も狂死した父のことを考へる年頃である。

主人の達雄は高い心の調子で居る時であつた。中の間にある古い柱の下が日々の業務を執るところで、番頭や手代と机を並べて、朝は八時頃から日の暮れるまで倦むことを知らずに働いた。沈香、麝香、人參、熊の膽、金箔などの仕入、遠國から来る藥の註文、小包の發送、其他達雄が監督すべきことは数々あつた。包紙の印刷は何程用意してあるか、秋の行商の準備は何程出来たか、と達雄は氣を配つて、時には帳簿の整理のかたはら、自分でも包紙を折つたり、印紙を貼つたりして、店の奉公人を助け勵ました。

そればかりでは無い。達雄は地方の紳士として、外部から

持込んで来る相談にも預り、種々土地の爲に盡さなければ成らない事も多かつた。尤も、政黨の争鬭などはなるべく避けて居る方で、祖先から傳はつた業務の方に主に身を入れた。達雄の舊發と勉強とは東京から來た三吉を驚かした位である。

三吉が着いて三日目にあたる頃、連の直樹は親戚の家へ遊びに行つた。其日は午後から達雄も仕事を休んで、奥座敷の方に居た。そこは家のものの居間にしてあるところで、襖一つ隔てて娘達の縣る部屋に續いて居る。「お仙や。」とお種は茶戸棚の前に坐りながら呼んだ。お仙は次の新座敷に小机を控へて、餘念もなく藥の包紙を折つて居たが、其時面長な笑顔を出した。

「お前さんも御休みなさい。皆なで御茶を頂きませう。」

とお種に言はれて、お仙は母の側へ來て、近過ぎるほど顔を寄せた。母の許を得たといふことが斯の娘に取つて何よりも嬉しかつた。

三吉も入つて來た。

「貴方。」とお種は夫の方を見て、「鳥渡まあ見てやつて下さい。三吉がそこへ來て坐つた様子は、どうしても父親さんですよ……手付なぞは兄弟中で彼が一番克く似てますよ。」
「阿爺も斯様な不恰好な手でしたかね。」と三吉は笑ひ乍ら自分の手を眺める。

お種も笑つて、「父親さんが言ふには、三吉は一番學問の好きな奴だで、彼奴だけには俺の事業を繼がせにやならん……何卒して彼奴だけは俺の子にしたいもんだなんて、よく左様

言ひ／＼したよ。」

三吉は姉の顔を眺めた。「あの可畏い阿爺が生きて居て、私達の爲てることを見ようものなら、それこそ大變です。弓の折かなんかで打たれるやうな目に逢ひます。」

「しかし、お前さん達の仕事は何處へでも持つて行かれて都合が好いね。」とお種が笑つた。

達雄は胡座にした膝を癖のやうに動ふり乍ら「近頃の若い人には、大分種々な物を書く人が出来ましてネ。文學——それも面白いが、定つた収入が無いのは一番困りませう。」

「言はば、お前さん達のは、道楽商賣。」とお種も相槌を打つ。

三吉は答へなかつた。

「正太もね、お前さん達の書いた物は好きで、よく讀む。」とお種は言葉續けて、

「矢張若い者は若い者同志で、何處か似たやうな處も有らうから、成るべく彼にも讀ませるやうにして居ますよ……えゝえゝ、そりやもう今の若い者が私達のやうな昔者の氣では駄目です——そんなことを言つたつて、三吉、これでも若い者には負けない氣だぞや——斯うまあ私は思ふから、なるべく正太の氣分が開けて行くやうに……何かまた左様いふ物でも讀ませたら、彼の爲に成るだらうと思つて……」

「爲になるやうなことは、先づありません。」

斯う三吉が言つたので、お種は夫と顔を見合せて、苦笑した。

「お仙、兄さんにも、お茶が入りましたからツて、左様言つていらツしやい。」

斯うお種は娘に言付けて、表座敷の方に居る正太を呼びにやつた。

正太と三吉とは、年齢が三つしか違はない。背は正太の方が隆い。そこへ來て三吉の傍に坐ると、叔父甥といふよりか兄弟のやうに見える。

正太が入つて來ると同時に、急に達雄は嚴格に成つた。そして、黙つて了つた。

正太もあまり口敷を利かないで、何となく不満足な、焦々した、とはいへ若々しい眼付をしながら、周圍を眺め廻した。

古い床の間の壁には、先祖の書いた物が幅廣な軸に成つて掛つて居る。それは竹翁と言つて、橋本の藥を創めた先祖で、毎年の忌日には必ず好物の栗飯を供へ祭るほど大切な人に思はれて居る。その竹翁の精神が、何時までも書いた筆に遺つて、斯うして子孫に臨んで居るかのやうにも見える。

斯の室内の空氣は若い正太に何の興味をも起させなかつた。彼の眼には、すべてが窮屈で、陰氣で、物憂いほど單調であつた。彼は親の側に靜止して居られないといふ風で、母が注いで出した茶を飲んで、やがてまたふいと部屋を出て行つて了つた。

達雄は嘆息して、

「三吉さん、お前さんの着いた日から私は聞いて見たい／＼と思つて、まだ言はずに居ることが有るんですが……お前さんが持つて居る其時計ですね……」

「これですか。」と三吉は兵児帯の間から銀側時計を取出して、それを大きな卓の上に置いた。「極く古い時計でサ、裏に斯様な彫^{うづ}のしてある——」

「實はその時計のことで……」と達雄は言浚^うんで、「正太を東京へ修業に出しました時に、私が特に注意して、金時計を一つ呉れてやつたんです——まあ、左様いふ物でも持たしてやれば、普通の書生とも見られまいかと思ひましてネ——。ところが一夏、彼が歸つて來た時に、他の時計をサゲてる。金時計は奈何したと私が聞きましたら、友達からは非貸して呉れと言はれて置いて來ました、そのかはり友達のを持つて來ました、斯う言ふぢやありませんか。奈何でせう、その友達の時計が今度來たお前さんの帶の間に挟まつて……」

三吉は笑ひ出した。「一體これは宗さんの時計です。近頃私が宗さんから貰つたんです。多分正太さんも宗さんから借りて來たんでせう。」

達雄はお種と顔を見合せた。宗さんとは三吉が直ぐ上の兄にあたる宗藏のことである。

「どうも不思議だ、不思議だと思つた。」と達雄が言つた。

「三吉の方が正直なと見えるテ。」とお種も深い眼付をする。

金側の時計が銀側に變つたといふことは、三吉には左程不思議でもなかつた。「正直なと見えるテ」と言はれる三吉にすら、其位のこととは若いものに有勝だと思はれた。達雄は左様は思はなかつた。

「奈何いふ人に成つて行くかサ。」とお種は更に吾子の事を

言出して、長い羅宇の煙管で煙草を吸付けた。「一體彼は妙な氣分の奴で、まだ私にも好く解らないが——爲る事がどうも危くて——」

「正太さんですか。」と三吉も巻煙草を^ふ煙し乍ら、「なにしろ、まだ若いんですもの。話をして見ると心地の好い人です。がねえ。どうかすると斯う物凄いやうな感じのすることが有る。あそこは、僕は、面白いところぢやないかと思ひますよ。」

「實は、私も、左様も思つて見てる。」

斯う達雄が言つた。

「何卒まあウマくやつて貰はないと——橋本の家に取つては大事な人だで。」とお種は三吉の方を見て、「兄さんも此節は彼のことばかり心配しますよ。吾家でも、御蔭で、大分商法が盛んに成つて、一頃から見ると倍も藥が賣れる。斯の調子で行きさへすれば内輪は樂なものなんです。他に何も心配は無い。唯、彼が……」と言ひかけて、聲を低くして、

「近頃戀意にする娘が有るだテ。」

「有りさうなことだ。」と三吉は正太を辯護するやうに言ふ。

「お前さんは直に左様だ。」とお種は叱つて見せて、「若いものの肩ばかり持つもんぢや有りませんよ。」

「矢張この町の人ですか。」と、三吉が聞いた。

「え、左様ですよ。」とお種は受けて、「兄さんにしろ、私にしろ、どうもそこが氣に入らん。」

斯ういふ話をして居る間、お仙は手持無沙汰に起つたり坐つたりして、時には親達の話の中で解つたと思ふことが有る度に、獨り微笑んだりして居たが、つと母の傍へ寄つた。

「お仙ちゃん、御話が解りますかネ。」とお種は母らしい調子で言つた。

「えゝ解る。」とお仙は兩親の顔を見比べながら。

「解るは、よかつた。」達雄は笑つた。

お種は三吉の方を見て、「すこし込入つた話に成ると、お仙には好く解らない風だ。そのかはり、綺麗な氣分のものだぞや。」

「眞實に、好い姉さんに成りましたネ。」と三吉が言ふ。

「彼女も最早女ですよ。その事は私がよく言つて聞かせて、誰にでも普通に有ることだからツて教へて置いたもんですから、ちゃんと承知してる。斯うして大きく成つて、可惜いやなものだが、仕方が無い。行く／＼は一軒別にでもして、彼女が獨りで靜かに暮せるやうだつたら、それが何よりですよ。」

「そんなことをしないたツて、お婿さんを貰つてやるが可い。」と三吉は戯れるやうに言つた。

「叔父さんは彼様いふことを言ふ……」

とお仙は呆れて、笑ひ轉げるやうに新座敷へ逃出した。

風呂が涌いたと言つて、下婢のお春が告げに來た頃、先づ達雄は連日の疲勞を忘れに行つた。「お仙、ちやつと髪を結つて了はまいかや。」とお種は、爐邊へ來て待つてゐる髪結を呼んで、古風な鏡臺だの櫛箱だのを新座敷の方へ取出した。

「三吉、すこし御免なさいよ。」とお種は鏡の前に坐りなが

ら言つた。「私は花が好きだで、今年も丹精して造りましたに見て下さい——夏菊がよく咲きましたでせう。」

三吉は庭に出て、大きな石と石の間を歩いたが、不圖姉の後立つ女髪結を見つけて不思議さうに眺めて居た。髪結は種々な手眞似をしてお種に見せた。お種は笑ひながら、庭に居る弟の方を見て、「斯の髪結さんは手眞似で何でも話す。今東京から、御客さんが來たさうだが、と言つて私に話して聞かせるところだ——啞だが、惻好なものだぞい。」斯う言ひ聞かせた。

深い屋根の下にばかり日を送つて居るお種は、斯の啞の髪結を通して、女でなければ穿鑿して來ないやうな町の出來事を知り得るのである。髪結は又、人の氣の付かないことまで見て來て、それを不自由な手眞似で表はして見せる。其日も、親指を出したり、小指を出したり、終に額のところへ角を生ず眞似をしたりして、世間話を傳へ乍ら笑つた。

日暮に近い頃から、達雄、三吉の二人は涼しい風の來る縁先へ煙草盆を持出した。大番頭の嘉助も談話の仲間に加はつた。そこへお仙やお春が臺所の方から膳を運んで來た。

お種は嘉助の前に膳を据ゑて、

「今日は旦那も骨休めだと仰るし、三吉も來て居るし、何物も無いが河魚で一杯出すで、お前もそこで御相伴しよや。」

斯う言はれて、嘉助は癖のやうに禿頭を押へた。

「さ、御酌致しませう。」

と嘉助は遠慮深い膝を進めた。斯の人は前垂をメめては居るが、武術の心得も有るらしい體格で、大きな律儀さうな手

を出して、旦那や客に酒を勧めた。

何時の間にか話も若旦那のことに落ちて行つた。お種は臺所の方にも氣を配りながら、時々部屋を出て行くかと思ふと、復た入つて来て、皆なと一緒に息子のことを心配した。「いッそのこと、その娘を貰つてやつたら可いぢや有りませんか。」三吉は書生流儀に言出した。

「そんな馬鹿なことが出来るもんですかね。」とお種は嘲けるやうに言つて、「お前さんは何事も知らないから其様なことを言ふけれど。」

「それに、お前さま。」と嘉助は引取つて、紅く充血した眼で客の方を見て、「娘の親といふものが氣に入ります……是は、まあ、私の邪推かも知りませんが、どうも親が背後に居て、娘の指圖をするらしい……」

お種は何か思出したやうに、物に襲はれるやうな眼付をしたが、それを口に出さうとはしなかつた。

「よしんば、左様でないと致したところで、」と嘉助は言葉をついで、「家の格が違ひます。どうしてお前さま、彼様な家から橋本へ貰へるものかなし……」

暮れかゝつて來た。屋根を越して來る山の影が庭にもあり、一段高く斜に見える藏の白壁にもあり、更に高い石垣の上に咲く夕顔南瓜などの棚にもあつた。斯の家の先代が砲術の指南をした頃に用ひた場所は、まだ耕地として残つて居たが、その邊から小山の頂へかけて夕日が映つて居た。

百姓の隠居も鍬を肩に掛けて、上の畠の方から降りて來

た。

夕飯時を報せる寺の鐘が谷間に響き渡つた。達雄は、縁先から、自分の家に附いた果樹の多い傾斜を眺めて、一杯は客の爲に酌み、一杯はよく働いて呉れる大番頭の爲に酌み、一杯は自分の健康の爲に酌んだ。

「何卒して、まあ、若旦那にも好いお嫁さんを……」と嘉助は旦那から差された盃を前に置いて、

「早く好いところから貰つて上げて、一同安心いたしまするやうに……是が何よりも御家の堅めで御座いまするで。」

「そのお嫁さんだテ。」とお種も力を入れる。

「どうも斯の町には無いナア。」と達雄は眉を動かして、快調らしく笑つた。

其時、お種は指を折つて、心當りの娘を數へて見た。年頃に成る子は多勢あつても、いざ町から貰ふと成ると、適當な候補者は見當らなかつた。

「飯田の方の話よし。」とお種は嘉助の方を見て、「あれを一つお前に聞いて貰ふぞい。」

「えゝ、あれは引受けた。」と嘉助が言つた。

三吉は聞かぬで、「飯田の方に候補者でも有るんですか。」

「ナニ、まで左様ハツキリした話では無いんですがね、すこしばかり心當りが有つて。」と達雄は膝を動かす。

「聞き込んだ筋が好いもんですから。」とお種も三吉に言ひ聞かせた。「今年の秋は、嘉助も彼地へ行商に出掛けるで、序に精しく様子を探つて貰ふわい——吾家でお嫁さんを貰ふなんて、お前さん、それこそ大仕事なんですよ。」

斯の人達は、子と子の結婚を考へる前に、先づ家と家の結婚を考へなければならなかつた。

何時の間にかお仙も母の傍へ来て、皆な話に耳を傾けて居た。やがて母が氣が付いた頃は、お仙の姿が見えなかつた。お種は起つて行つて、何氣なく次の部屋を覗いて見た。

「お仙、そんなところで何をしてるや……」

娘は答へなかつた。

「斯の娘は、まあ、妙な娘だぞい。お嫁さんの話を聞いて哀しく成るやうな者が何處にあらず。」とお種は娘を慰撫めるやうに。

「お仙ちゃん、奈何しました。」斯う三吉が縁側のところから聞いた。

お種は三吉の方を振返つて見て、「お仙はこれで極く涙脆いぞや。兄さんに何か言はれても直に涙が出る……」

其晩、三吉は少量ばかりの酒に酔つたと言つて、表座敷の方へ横に成りに行き、嘉助も風呂を貰つて入りに裏口の方へ廻つた。奥座敷には達雄夫婦二人きりと成つた。まだ正太は町から歸つて來なかつた。

お種は立ちがけに、一寸夫の顔を眺めて、「正太もあれで三吉叔父さんとは仲が好いぞなし——叔父さんには何でも話す様子だ。」

「左様だらうナア。年齢から言つても、丁度好い友達だからナア。」と達雄が答へる。

「貴方は奈何思はつせるか知らんが……私は三吉の今度來たのが彼の子の爲めにも好からずと思つて……」

「俺も、まあ左様思つてる。」

斯様な言葉を交換した。不圖お種は洋燈の置いてある方へ寄つて、白い、神經質らしい手を腕の邊まで捲つて見て、蚤でも逃がしたやうに坐つて居たところを搜す。

「痒い／＼と思つたら、斯様に食ひからかいて。」とお種は單衣の裾の方を掲げながら搜して見た。

「左様どうも苦にしちや、えらい。」と達雄は笑つた。

「一匹居ても、私は身體中ゾク／＼して来る。」

斯うお種は言つて、若い時のやうな忍耐は無くなつたといふ風で、やがて笑ひながら臺所の方へ出て行つた。

三吉が東京から訪ねて來たことは、達雄に取つても嬉しかつた。彼は眞身の兄弟といふものが無い人で、日頃お種の弟達を實の兄弟のやうに頼母しく思つて居る。三吉が來た爲に、種々話が出る。話が出れば出るほど、種々な心地が引出される。子に對する達雄の心配も一層深く引出された形である。

平素潜んで居たやうなことまで達雄の胸に浮んで來た。先代が亡くなつたのは、彼がまだ若かつた時のことで。その頃は嘉助同格の支配人が三人も詰切つて、それを藥方と稱へて、先祖から傳はつた仕事は言ふに及ばず、經濟から實際まで、一切左様いふ人達で、斯の橋本の家を堅めて居た。彼もまた、青年の時代には、家の爲に束縛されることを潔しとしなかつたので、志を抱いて國を出たものである。白髪の老母や妻子を車に載せて、再び斯の山の中へ歸つて來る迄には、何程の波瀾を経たらう。長い間かゝつて地盤を築き上げた先

祖の事業は彼が半生の努力よりも根深かつた。先祖は失意の人の爲に好い「隠れ家」を造つて置いて呉れた。彼は家附の支配人の手から、退屈な事業を受取つて見て、はじめて先祖の畏敬すべきことを知つたのである。

「丁度正太が自分の若い時だ。」と達雄は自分で自分に言つた。「いや、自分以上の空想を抱いて、斯の家を壊しかけて居るのだ。」と思つた。彼は、自分の子が自分の自由に成らないことを考へて、其晩は定時より早く、可憐さうに寐床へ入つた。家のものが皆な寢た頃、お種は雪洞を點して表座敷の方へ見に行つた。三吉と直樹とは最早枕を並べて眠つて居たが、まだ正太は歸らなかつた。お種は表庭から門のところへ出て、押せば落り戸の開くやうにして置いた。嚴しい表庭の戸締り掛金だけ掛けずに置いたは可愛い子の爲であつた。

二

大森林に連續いた谷間の町でも、流石に暑い日は有つた。

三吉は橋本の表座敷に籠つて、一夏かゝつて若い思想を纏めようとして居た。姉は仕事に疲れた弟を慰めようとして、暇のある時は、斯の家に傳はる陶器、漆器、香具の類などを出して來て見せた。ある日お種は大きな鍵を手にながら、裏の土藏の方へ弟を導いて行つた。

高い白壁の隣には、丁度物置藏と反對の位置に、屋根の低い味噌蔵がある。姉は其前に立つて、大きな味噌桶を弟に覗かせて、毎日食膳に上る手製の醬油は其中で造られることな

どを話して、それから嚴重な金網張の戸の閉つた土藏の内部へ三吉を案内した。

二階は廣く薄暗かつた。一方の窓から射し込む光線は澤山積んである本箱や古びた道具の類を照らして見せた。姉は今一つの窓をも開けて、そこにあるのは祖母さんが嫁に來た時の長持、こゝにあるのは自分の長持、と弟に指して話し聞かせた。三吉は自由に橋本の藏書を獵ることを許された。

姉は出て行つた。三吉は本箱の前を彼方は方と見て廻つた。其時、彼は未だ自分の生れた家の焼けない前に一度歸省して阿爺の藏書を見たことを思出して、それを斯の家のに比べて見た。こゝのは其程豊富では無かつた。三吉の阿爺が心酔したやうな本居派の學說に關する著述だの、萬葉や古事記の研究だの、和漢の史類だの、詩歌の集だの、左様いふものは少なかつたが、其かはり橋本の家に特有な武術、武道などのことを書いた寫本が澤山ある。經書、子類もある。誰が集めたものか漢譯の舊約全書などもある。見て行くと、三吉の興味を引くやうな書目は少なかつた。窓に寄せて、大きな柳行李の蓋が取つてあつて、その中に達雄の筆で表題を書いたものが幾冊か取散してある。舊い日記だ。何氣なく三吉はその一冊を取上げて見た。

直樹の父親の名なそが出て來た。それは三吉が妹と一緒に東京で暮した頃の事實で、ところ／＼拾つて讀んで行くうちに、少年時代の記憶が浮び揚つた。その頃は姉の住居でもよく酒宴を催したものだつた。直樹の父親が來て、「木曾のカノリサン」などを歌ひ出せば、達雄は又、清しい、恍惚と